



## レジデントの情景

### My Life in New York

①

# The long and winding road

白 賢 Hyun Baek  
ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院

本連載は、現在ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院に留学中の筆者が留学生生活を綴る日記である。当初、アメリカの歯学部で正規で入学した訳ではなく、また歯周病科や補綴科などの専門医養成のための正規コースであるレジデンスプログラムに合格して留学した訳でもなかった。個人的な備忘録として、また友人向けの近況報告のためFacebookで書いていた。しかし、日本でお世話になった方々への恩返しと、これから留学を目指す若い先生方にとって何かの参考になればと思い、本誌で連載を行うことにした。特に恩師から、いつか必ず自分の体験を若い先生に還元するよう言われていたことも、こうして留学日記を書くことになった理由の一つである。

私は歯学部在学中、決して優秀な学生ではなかった。成績は悪くなかったものの、テストは一夜漬けで乗り切り、実習や授業もそこそこに。ラクロスのコーチなどスポーツに明け暮ればかりで、どちらかと言うと周囲からは「学生で入学してきたけれど、何しに歯学部に来たの？」と思われていたことだろう。したがって、歯学部を卒業した時には、先輩やスタディグループの先生とのコネクションもなく、新卒の就職活動はインターネットの求人募集しか頼るところがないような研修医だった。留学するにあたっては、誰かが留

学資金を準備してくれた訳でもないし、親や医局が留学先を紹介してくれた訳でもない。

しかしながら、そんな平凡な新米の歯科医師が留学を志し、留学資金を工面し、技術を磨き、知識を高め、留学するまでにどういった準備をしたか、またどのような留学生活を送っているのかをありのままに書き記すことは、逆に日本で厳しい環境のなかで生きている歯学部の学生や若い歯科医師にとって、何かの励みになるかもしれない。この留学日記は、そんなどこにもない普通の歯科医師の、留学への道のりと留学中の生き様がそのまま綴った体験記である。そして、医学部への臨床留学に関する書物や、歯学部専門医養成プログラムを紹介している雑誌やハウツー本はあるが、留学に必要な情報や留学生活の理想と現実をリアルに伝えてくれる媒体もなく私自身、情報収集にはたいへん苦労したことも本連載を引き受けようと思った一つの理由である。歯科臨床留学を志している人には留学の理想と現実が少しでも伝われば、また一人でも多くの人に何かのきっかけになったり、自分もやれると思えるようになれば幸いである。留学を夢見た歯科医師の無謀な挑戦が、一人でも多くの歯科医師に何らかの刺激となり、それぞれの歯科医師としての人生を生きるうえで、何かの

決断を迫られた時、脳裏によぎる存在足りうるならば、これほど嬉しいことはない。

### 最初のミシガン留学がすべての始まり

これから連載するにあたり、まずは留学するに至った動機について触れておきたい。私がアメリカに留学してみようと思ったのは、かれこれもう20年も前の話になる。実は以前、文系の私立大学に在学していた時、一年間休学してミシガン大学のあるミシガン州アナバーという街に一度留学していた。留学中は、ミシガン大学のクラブチームでラクビーを愉しみ、コミュニティカレッジでいくつかの授業に出席して単位を取得し、ボランティア活動にも積極的に参加しながら、自分の将来や人生についてじっくりと考えることができた。そして、いつかアメリカに戻ってきて、今度は自分の仕事で思い切り真剣勝負してみたい、という強い思いを抱くようになった。この一回目の留学がまさに私の人生を変えた。

この留学がきっかけとなり機一転、私は歯科医師になる決意をした(詳しくは4月号参照)。しかし、法学部法律学科の息子が留学から帰国するなり、歯科医師になりたいと突然言い出した。どのように感じるだろうか。

当然、周囲は大反対である。父兄や姉弟、友人は全員が反対するなか、最後は母親の鶴の一声でようやく賛同を得ることができた。あの時、自分のわがままを許してくれた両親には本当に感謝している。こうして何とか歯学部に入學し、無事に卒業、さらに数年後には開業と、歯科医師として少しずつだが着実に道を歩んでいた。開業後はクリニックの経営も軌道に乗り、幸い患者さんやスタッフにも恵まれ、充実した日々を過ごし、何の不自由もない生活を送っていた。臨床の道においては、スタディグループにも属し、週末は講習会に出かけ、臨床の知識やスキルを身につける努力を続けていた。現状に満足し始めると人間というのは不思議なもので、変化を恐れるようになる。だがそんな充実した毎日のなかでも、「いつかは留学したい」という希望は私の中で消えることはなかった。

### 自分を突き動かすものは「挫折」体験

あれから十数年の月日が流れ、よくよく当時のことを振り返ってみると、やはり学生時代のラクロスでの体験が大きかったように思う。私は在籍していた慶応大学ラクロス部で全日本選手権三連覇を達成する瞬間、チームの一員として立ち会うことができた。入部当初の「とにかく勝てるスポーツ」をやりたい、可能ならば「日本一」になってみたいという目標を達成し、最高の仲間と共に最高の学生時代を過ごすことができた。しかし、私は主力選手として活躍できた訳ではなく、決勝戦では怪我と実力不足でチームに迷惑をかけた。最後は途中交代、試合後の祝宴を介しては嬉しくないという気持ち。とりあえず終わってホッとしたのと、その後はお互いの思いも手伝って悔しくてずっと泣いていたのを見ている。何



より、それまでの3年間の学生生活に納得していなかったのである。その時、「将来、仕事に就いた時には納得のいく仕事をやり通したい。仕事に関しては妥協したくない。学生時代の自分自身に勝てなかった弱い自分に負けたくない」と思った。学生時代によくある挫折体験と言われればそれまでだろう。もちろん、ここで書くほどの綺麗な思い出ではないことはわかっているつもりだ。こうして昔の話を今更書くのは気分すかしいが、その後に動き始めてからも、学生時代に抱いたこの挫折感が心の中で消えることはなかった。これが「原体験」であり、留学するきっかけになったと言っていると思う。日本一という成功体験も学生時代の貴重な経験であったが、おそらく私自身にとっては、この時の悔しさ、ネガティブな経験のほうが後の人生に与えたインパクトとしては大きい。今でも度々その時を思い出そうになった時、あの時のことが思い浮かび、踏ん張ることができるところをみると、確かにあの時の思いがしっかりと自分の中に、不甲斐ない自分自身の姿を映し出す「記憶装置」として存在していると言えらるかもしれない。

### 紆余曲折を経て、2度目の留学を決意

もちろん、実際の留学に至っては、慎重にその理由、動機を自問自答し、あらゆる可能性を探ってみた。開業してからの現状、留学により失う機会・費用、将来的なビジョン、あらゆる状況を想定し考え抜いた。結論としては、アメリカで補綴学全体を理論と実践の両方の視点から、包括的に系統立てて学ぶことは必ず役に立つ、いやむしろ必要不可欠だと判断した。そして何よりこの歯科医師という職業を極めてみたいと思った。ここにあげたことはすべての理由ではないが、さらに上のレベル、自分の知らない違う世界があり、そのチャンスを掴める可能性があるのならチャレンジしたい。自分自身の人生に後悔だけはしたくない。学生時代の思いがまだにアツアツと心の中に火をともし続け、消えることはなかったのである。こうした紆余曲折を経て、最終的に2度目の留学が実現したのが38歳の時。最初に留学を終え、アメリカにいつか戻って来ようと思っていた。すでに16年の歳月が流れていた。